

# 廣告

主筆 田中智學居士

## 妙宗

四月六日「第五編」第四號「既刊

送金は師子王文庫宛鎌倉局振込の事  
 毎月一回(六日) 毎月大附録附發行  
 所相模鎌倉要山師 子王文庫  
 定信一部金十錢 (附録共) 郵代金一  
 錢壹ヶ年前金壹圓 貳拾錢(不要郵税)

主筆 加藤文雅

## 日宗新報

毎月三回(八の日) 發行所武藏  
 池上日宗新報社 定信一部金五錢  
 十八冊(半年分) 八十五錢、卅六冊  
 (壹年分) 壹圓六十 五錢、一切前金の事、送金は池上郵便受取所  
 へ振込み「日宗新報主任加藤文雅」と御指定の  
 事 四月八日「創立第八百九輯」革新第二百三  
 十輯「既三刊」

# 稟告

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす  
 一本誌は一貫五錢十二冊前金五十七錢廿四冊前  
 金一圓八錢郵券代用は一割増但五厘切手に限  
 一 讀讀申込の節は住所姓名を附書にて認むべし  
 一 爲替は武藏國品川郵便局へ向け御振込の事  
 一本則は別に領收書を發せず但し領收證を要す  
 一 向は返信料を封入するか或は爲替振込の節  
 一 拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし  
 一 廣告料は五號活字廿四字詰每一行金七錢なり  
 明治卅五年五月十五日印刷發行

發行所 井村 尚也  
 編輯人 山根 顯道  
 印刷人 鈴木 障學

# 發行所 統一團團報部

東京府荏原郡品川町元南品川四百十二番地

目次  
 一 聖祖當年の大理想……本多日生  
 ▲靈妙なる開宗式 ▲美態の周足  
 ▲太陽と聖祖の關係 ▲本地と垂迹  
 ▲月氏の傳法と日本の佛法 ▲三大尊願  
 ▲大悲悲の表彰 ▲種種問題の大解決  
 ▲大改革の宣言 ▲圓浮統一の大梵音  
 ▲常樂院日經上人(積)……野口義輝  
 ▲流離 ▲說義  
 ▲鐘と御經……松尾忍水  
 ▲學則改正の必要を論じて敢て  
 ▲本宗教師に望む……廣部永真  
 ▲念願……南山道人  
 ▲日蓮門下の勢力……窪田貞二

統一彙報  
 一 僧俗同信會の成立……難 思 菴報  
 一 大坂開宗紀念會の概況……我 妙 生報  
 一 坂界の教況……  
 一 第二回專門夏期講習會……  
 ▲廣島の開宗紀念會 ▲福井の紀念法要  
 ▲熊本長寺の紀念法要 ▲福田五松十の葬儀  
 ▲宗義顯揚演說會 ▲宗友會の會合  
 ▲各派統一實行委員會 ▲紀念大會總會

廣告數件

第八十六號

明治三十三年六月十五日發行

# 統一團團報



# 第二回專門夏期講習會開設豫告

○本會徵力自から圖らず幸ひに各教團有志の協賛を得て昨夏始めて第一回夏期講習會を相模灘頭波靜かなる寂光山の靈地に開けり歳華一還又た將に伊豆伊東の靈地に開設せられんとす冀くは聖祖門下の志士來り會せ

- 會場 伊豆伊東佛現寺
- 會期 七月廿五日より八月三日迄十日間
- 會費 一日實費三十五錢
- 講師 守本文靜師、本間海解師、藤田堯惇師（講題未定）
- 同 本多日生師講題「祖書研究の各方面」
- 科外 「台延餘霞」講師清水龍山師
- 申込 七月中旬迄に左記へ

地は是れ本化上首法華經色讀の聖跡瀝波勝巒自らは是れ本地の風光を示し一句の虚空會現前せん眞日蓮主義を知らんとするもの自ら進んで眞日蓮主義を發揚せんとするものは老幼男女を問はず大に來り會せよ

東京市谷中日暮里本行寺内  
東京府下在原郡品川町  
統一團團報部

統一團報第八拾六號

(明治二十五年六月十五日發行)

## ●聖祖當年の大理想

〔四月廿二日深川淨心寺に於ける紀念大會の演説〕

此度は宗祖日蓮上人の宗旨をわね開きなされてより、六百五十年に相當致しまするに就て、日蓮上人の教の下に信仰を捧げて居りますものは、何れの派に属するを問はず、悉く提携を致しまして、先づ此東京の土地に日蓮上人の開宗紀念の大會を開く事に成たのでありまして、唯これは東京計りて御坐りません。日本全國到處に同一の催しがある事になりまして、私共は過般已來各地方を巡回致しましたが、西は九州の端より東は北海道に至る迄大法要を催される事に成て居ます。其内に特別志のあるものが東京に集るので、其會員既に一萬數千に成て居ります。兎に角日蓮上人開宗已來六百五十年の今日に宗義が傳つて、此多數の人が開宗を祝し祖師の御恩を思ひ出す事は、宗祖上人にとりても御満足と考へます。私共は各地に於て既に紀念會に出席しました、漸く一昨々日歸つてまた自分の村も充分休まつて居ませんが、折角の大會であれば是非出席致したいと思つて、今日も當寺に出ました

本日た馳致したい事は聖祖當年の大理想、則ち日蓮上人が六百五十年已前房州清澄山朝日の森に立て、東海

統一團報

# 第二回夏期講習會開催に就て

肅んで全國の聖祖門下特志眞俗諸士に請ひまつらんと欲する處のものあり開は他事ならず昨夏相模灘口に開きし講習會は聖門の學生傳たる橘香會の手により經營せられ幸に多大の妙果を収めて門下各教團の勢からぬ同情を博せりしが本年も亦昨夏講習會場の決議により橘香會の發起として第二回の會合を見るべく目下奔走經營中に有之諸般の準備は事ゆへなく周足すべからんも唯憂ふる處は金銀に餘容なき學生の悲しき昨年同如き既に收支決算上虧からぬ不足を生じ無同盟雜誌に於て本年の分開の義助をなし漸く其首尾を全ふせし爲事仍ど共に 聖業展進の贊助として多少に抱はらざる義捐を御申出被成下度此段特に謹告候也

鎌倉要山  
武藏池上  
全品川  
師子王文庫  
日宗新報社  
統一團々報部

廣 告  
小生儀今回宗務廳を辭し七里法華の自房に歸り新山田臥の間に逍遙す  
千葉縣長生郡新治村  
桂安立寺住職  
窪田純榮

五月二十日

本多日生師演説  
増田聖道君遠記



より太陽が登りなされる時に、南無妙法蓮華經と十度計り題目をお唱へなされた。式と云ふ可んば是が關宗式である、唯山の端に立ちて一個の日蓮上人が、海を隔て、太陽の登るに向て題目を唱へたに過るので、甚だ簡短のものでありすすけれども、其日蓮上人の御精神の内に包まれて居りまする大理想は、どう云ふもので有たであらうか、外形に現れて居る事は、唯手を合せて太陽に向ひ南無妙法蓮華經とお唱へなされたに過ぎなひけれども、其時日蓮上人の御精神に働きたる大精神は、どう云ふもので有たらうかと云ふ事に就て聊か所見を陳ふる考で、私は此論題を掲げたのでありす

そこで聖祖當年の大理想をお唱するに先つて一言演て置きたいのは、日蓮上人は御承知の通り段々反對がありまして、日蓮上人の御生涯中には大難四ヶ度小難數知れず、殆んど迫害を以て充されて居りましたが、今日の公平なる研究に於ては、どう云ふ様に成て居るか申せば、唯に日蓮上人に伏従して居るものが高徳英傑と云て語るでなくして、苟くも佛教の權途に執着しない宗我見法我見に執着しないものは、基督教徒であるも、權教徒であるも、日蓮上人の高徳が確かに認められて居るのであつて、例は信念とか忍耐とか執誠とか、或は其剛毅とか云ふ様な人の美徳です……一旦決心したる事は如何なる難難に遇ふとも幾百萬の敵あるども、衝切て仕送ける熱誠とか信念とか、又は考の大きい事で一局部でなく全身を考へる抱負、支離滅裂の佛教に就て統一の意見を定むると云ふ様な事、此剛毅とか率直とか活動とか抱負、誠見、熱誠、信念と云ふ如き一つ備へて居ても非常に價値あるものが、日蓮上人には總て揃て居るのであつて、こう云ふ意見とか熱誠とかの文字の上に、日蓮と云ふ名を加へれば非常に活々來るのでありす、信念と云ても私共の信念と云つては人は解しませんが、日蓮上人の信念と云へば、非なる立派なものであつたと思ふでありす、是は上人の高徳の世人一般に認められた結果であると思つてよからと思ふ(喝采)うれでありすからう云ふ日蓮の各方面の高徳を賞揚しするは、我等の如く宗義的に日蓮上人に敬服し居るもの、側からで無くとも、天下に日蓮上人の高徳を鼓吹するものは満ちて居りますから、この記念大會に就てそう云ふ方面を演べる事は、關て、日蓮上人の宗教的大理想を幾分か天下の人に紹介して見たいのでありす、今時分に日蓮上人がゑらいと云ふ事は敢て演へすとも世間の識見ある人は皆認めて居る、日蓮は日本の佛教歴史中に於て特別に光明を放つて居る、日蓮當時にあつて時の執權北條は弘法牌を發し、「三國に比類なき妙宗後代有り難き尊僧何れの宗か之に如ん日本國中に於て弘通功があるべからず」と云て居る、實に日蓮は日本でも支那でも天竺でも佛滅後二千二百餘年三國に比類なき方であることは、今更喋々するの必要はありませぬ日蓮上人が建長五年四月廿八日題目を唱へ始め給ひしは年三十二、うれからして其前清澄山から學問に御出なされたのは二十一でありす、則ち二十ヶ年の御遊學……遊學と申し文しても唯考へなくして遊學したのでなく、清澄山に居られた當時二十一の年に書かれたる戒牒即身成佛義、此書によりすれば佛教全躰の解釋に就て大躰の御意見は定つて居る、遺文録で見れば達長と云て納所坊さんの時に書かれた即身成佛義其時に佛教界に於ける各種の問題に一大斷案を下したるものであるから、遊學に出て各處に於てお調べなされる時に、何も知らんものが色々の事を疑惑の内に調べるとは大に趣を異にして居る、基督教の内村鑑三氏も云て居る、既に定た意見を以て各處に於て問はし、意見を各處に於て試練し、二十ヶ年の星霜試練を経て、



是ならば一點非難の入れべき處はないと云ふので、始めて建長五年四月廿八日清澄山旭の森に於て、朝日に向ひ南無妙法蓮華經と唱へ給ふ開宗式になつて居るのであります、故に其已前に於て二十一歳の時に殆んど佛敎の解釋意見は定つて居りましたのであります、建長五年から己後段々次第に法門を御發表なされたのであります、我宗に於ては佐渡後に眞實の事を説かれたと云ふのだから、其前にはまだ本當の事が顯れて居らんと云ふが、夫は表面に現れん丈で上人の思召はちやんと定て居たものであります、夫は後に上人のお書になつた御文章を以て證明します、南無妙法蓮華經と云ふ事は一切の解釋が定つてお始めになり、六十一に至る迄三十年の間お弘めなされたのである、佛敎統一の大教義は建長五年に定つて居るを次第に發表したのであります、其次第はちやうど大聖釋迦牟尼世尊が法門を説り究められた上、即ち一切智者一切見者として「ソツクリ」お説りになつた後、其法門を顯揚さるゝ順序が、華嚴阿含方等般若夫から法華經と段々次第にお説きになつたと同じ事で、宗祖宗旨發表の順序に於ける佐渡後の宗祖の精神も、矢張清澄山に於て旭日に向て題目を唱へなつた時に、一切揃て居つたものであります、夫は録内廿七顯佛未來記に書てあります、こう云ふ事がある、「日蓮此道理を存する事既に二十一年なり」此道理とは日蓮が主張する三大秘法、直ちに此主張の頂點を捉へ來りて、此法門を知て居る事は今より二十一年前に定て居つたものであると例せられて居る、此二十一年を勘定しますると、此御書をなされたのが文永十癸酉の年五月十一日で、夫から二十一年前に溯れば丁度建長五年に當ります、日蓮が佐渡後に發表したる三大秘法は、其二十一年前旭日に向つて題目を唱へなされた當時の思想界に決定して居つた事で、夫と言ひ顯はしたが日蓮此道理を存する事既に二十一年……

うらうすると云ふとお祖師様が三十年間に主張せられたる一切の法義議論は、既に旭日にお向ひなされた時に定つたとすれば、開宗當年の理想は一切の御妙判から窺ひ知る事が出来る、うらうするとどう云ふ事を考へなつて居たかと云へば、日蓮上人が御自身に仰せられた御言葉があるから、其御言葉を引證してお噴致しませう、

第一に太陽と日蓮上人の關係、日蓮上人は太陽が大愛好であつたと思ふ、元來宗教思想は太陽に關係が深いものであるが、特に上人は深かつたから日蓮ども自ら名乗れた位であります、それは太陽の活用と日蓮の理想が調和したのであります(拍手大喝采)夫は土臺は神力品で上行菩薩を批評してある、日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯人世間に行じ能く衆生の闇を滅すと、日月が闇の冥きを滅するが如く衆生の闇きを照して、光明を放つものであると云ふ事を釋迦牟尼世尊が仰られた、則ち日の説明がしてある、本地の上で日と日蓮との關係が付て居る、夫から從地涌出品に上行菩薩を賞めて、難問答に巧みにして其心畏る所なく忍辱の心決定し端正にして威徳あり十方の佛の讚め給ふ所なりと説てある、是が其宗旨の弟子や信者が讚めるのでない、佛様から讚められてある法華經の中に讚められてあるのであります、うここで土臺本地から日と日蓮は關係がありすから、録内十九三澤抄に上人が「此法門出現せば、正法像法に論師人師の申せし法門は、皆日出て後の星の光、巧匠の後に拙さを知るなるべし、此時には正像の寺塔の佛像僧等の靈顯は皆消失て、但此大法ばかり一闍浮提に流布すべしと見へて候」とあります、日蓮上人が現れて法華經の最



爲第一たる事を知らしめ、一大本佛が顯現すれば樂師觀音文珠等はちようど星の光の様なもので、一つの太陽が現れれば皆光を失てしまふ、されば一佛教中に於ては一個の宗旨をのみ存立すべきものである、外の色々の文句を切々に唱へて居れば教旨に統一がない事になる。又多神散漫の思想があつて阿彌陀様觀音様地藏様と色々のものを支離滅裂に崇拜せしむるは大なる謬でありませう、夫はちようど星の光であつて、東に行く時には東の星にたよる西に歩く時は西の星を使う様なものであつて、何處此處と云ふ考を持つは大變の間違で、常持伽藍が大きいと利益があると思ふのは、ちようど貝売が大きいと中に居る處の貝が大きいと思ふと同じで、大きな堂が建て居れば其中にある佛がゑらいと思ふ、貝ならば貝売が大きいと中實も成程大きい、人間の方でやつた事は、幾等大きく祭られて居るも中に居る神佛の力用と云ふものを認めずしては、何處迄も迷信である、堂が大きくわつて色々祭られて居るものが數多くあるから、それで利益もあると云ふ考のあるのは甚しき迷信、法華經の中の理想と云ふものは決してうう云ふものでない、南無妙法蓮華經は人間の多くの崇拜物及信仰の標準である、正法像法の論師人師の弘めし事は、其當分々々の法門を一時的に説いたのである、佛教全統の統一の上から斷案を定めたものでない、佛教の統一主義……統一主義には他の佛陀神明を捨てると云ふ譯でない、恰も太陽が出れば星を殺すでなく星は光つて居るまゝ、星の光は太陽に映奪されて仕舞い、何も星が引込むでもない、太陽の光に奪はれて隠れてしまふ、鹽燭の光は開い處には光つて居るが太陽の前へ出れば消へて居るのか燃へて居るのか分らん、太陽が一たび隠れたならば光を放つけれども、太陽の光が常に現はれて居れば、其等の光は皆奪はれられる、宗祖上人は他の佛教を潰して仕舞ふと云ふのでもない、權教を廢棄はすと云ふのでもない、其等の一切の法門は一たび南無妙法蓮華經が現はれたならば星の光りの様なもので、皆法華經の光りの中に奪はれ攝収されて仕舞いのである（拍手喝采）願みれば其當時の宗祖の思召は統一の南無妙法蓮華經か現はれたならば、正法像法の論師人師の流を汲めるものも皆一同に南無妙法蓮華經と唱へ、この大法計り獨り流布すべし、星の光りは消へて太陽獨り先づ日本を照らし又大に世界を照らすが如く、日蓮の議論は一切佛教を統一したる處の大理想を結束して南無妙法蓮華經と云ふので、此上から云へば開宗式は日出て後の星の光り巧匠の後に拙きを知ると云ふ佛教統一の大主義を發表し給ひし一大宣言であると思ふ（ヒヤ）拍手大喝采

然るに日蓮上人の流に居て猶ほ此統一の主義本尊を忘れ澤山色々のものを拜むものあるは、太陽が出て居るに星の光りを尋ね廻る様なもので、星の三つや四つや有ても無くても旭日が出ればうんなもの、光は皆奪ひ去られて消へて仕舞いのである、其旭日の出で居るに關らず、まだ星の光を尋ねるが如きたはけた事をして居るのは、其人は丸で盲目なのである、宗祖が旭日に向て題目を唱へ給ひしは、太陽が一切の光を奪ふが如く一切の佛教の統一主義の爲めに唱へ給ふたのである（大喝采）日本人は淺蕩なる考、思慮なき考、けちくさい景見て居るから、此統一の大主義が分らんのだ（拍手喝采）、うんな事では幾等法華經を信すると云ても、此天地法界を包合し、一切佛教を統一したる法華經の信者とはならぬのである、法華經は日天子の如し、然るを法華經の光を二錢や三錢の鹽燭や洋燈の光と同じ様に見る乞食根性で理想し、自ら信者と云て足れりとして居るは甚しき間違であるのだ（拍手大喝采）それからして今一つ日の關係をお話しすれば、日蓮上



人の思召の内には斯う云ふ事がある、願佛未來記諫曉八幡抄にある「月は西より出で、東を照らし、日は東より出で、西を照らす、佛法又以てかくの如し正像には西より東に向ひ、末法には東より西に往く、乃至佛法必らず東土日本より出づべき也」、月の光は最初は三ヶ月でかすかにしか光らん、夫が段々と進んで十五夜の月になると丸で光る、お月様の出處が三ヶ月から十五日迄は遠ふ、うこで光りも遠ふのである、則ち月が西から出て段々と東に移る、佛教が月氏から支那朝鮮日本に傳つて居る、日蓮上人は日は東より出で、西を照らすと云ふが如く、佛陀の本懐本門壽量品の三大秘法と云ふ廣大深遠なる教旨をば、此國に於て顯はされた、夫が顯はれたならば次第に西に及んで、今云ふ西洋各國にも弘まり、一闍浮提第一の本尊此國に立つべし、日本乃至一闍浮提一同に南無妙法蓮華經と唱ふべし、此大理想大精神が籠つて居るので、其大精神がちようと太陽が出て先づ日本の國を照らし、夫からして次第に西洋各國をも照らすが如く、大法が日本國に起りて人類の精神界の闇、心の闇を照らすので、日蓮は此佛教統一の大議論を基として、闍浮提に此宗旨を建て始められたものでありませう、うれであるから斯の如く言葉をつめて言ふ事が出来る、月は西より出で、東を照らす月氏の佛法東へ移るべき瑞相なり、日は東より出で、西へ入る、日本國の佛法月氏へ還るべき瑞相なり、佛法必らず東土日本より出づべきなりとの大精神を發表し給ひしが旭の森の開宗である、日本に始めて法華經が弘まり日本一國を先づ照らし、次に一闍浮提に廣宣流布する題目なりとの理想を旭に連結して題目をお唱へなされたのでありませう

夫からして今一つは開目抄に我は日本の柱となりん大船となりん眼目となりんと仰せられて居る、人は皆眼がわいて居ると言ふが、それは肉體の眼が閉て居るのみで、又たとひ人造を學んで佛道を學ばんと完全な眼は開けない、太陽が出れば物を見る眼が有ても、其は借光眼で、光りをかきんければ物が見へぬ、夜になると借光眼は役に立たん、太陽の光明を受けて始めて物が見へるので、光を取て仕舞へば閉て居る眼も盲目も同じである、夜分太陽がないと電氣燈とか洋燈とか何か外の光を借りんと薩張分らん、うう云ふ譯で精神から云へば、教へざれば禽獸に同じで教へて始めて眼が開く、教へて始めて教義のよしあしが分る、うこで日蓮上人は日本の眼目となりんと仰せられた、其精神の盲目を開けるには、うれには在來末だ顯はれざる三大秘法、初めて之を顯はし以て一切衆生の眼となりんと云ふ思召があるから、ちようと眞闇な夜が明る様なもので、佛滅後二千二百餘年末だ顯はれざりし題目をお唱へなされた、暗黒世界が太陽の現れによりて明かになりし如く、日本人が此教義によりて世界に大なる光明を放ち、其光明を借りて眼を開いて喜ぶべく題目をお唱なされたのである(拍手大喝采)

此に於て日蓮の國家的思想を考へなければならぬ、我れ日本の柱となりん我れ日本の眼目となりんと嗚呼偉なる識上人の思想、これに就ては時間がないから後日又お唱します

今一つお唱したい事がある、一切衆生の異の苦を受けるは日蓮一人の苦なりと仰せられてある、世間に殆んど苦痛のないものはありませう、金錢に苦むものもあれば、家庭が穩かならんで苦むものもあれば、思想が合はんで苦むものもあり、殆んど何人でも色々の苦痛を感せないものはない、其を大勢のものが受ける苦は悉く日蓮一人の苦なりと仰せられて居る、世間の親にしても五人の女の子供を持って居るとすれば、最早嫁



に行かねばならん年頃であるに、病氣に罹つて終にも行かんで居れば、其五人の子の苦みは親の苦み親の慈悲心であります、衆生の異て居る苦みは日蓮一人の苦みなりとの大理想である（トヤ）（拍手大喝采）是が日蓮上人と太陽との關係を以て大慈悲心を現はされて居ります、太陽は私がない、此方を照して彼方を照さんと云ふ事はない、太陽の光を受けて總ての動物植物は生々化育するではありませぬか、日産の草木は花が咲きませぬ、日が照しませぬと人間は生育しませぬ、日の光によりて生々化育します、太陽は光明計でなく實際の活きた利益を施しつゝあるもの、動物にも草木にも普及して居ります、其如くで一切衆生の異の苦を受けるのは日蓮一人の苦なりと思召したのである太陽が世界を光被するが如く日蓮上人は一切衆生をして大に生々化育せしめ、先づ生前を安んじて更に没後を助けんと立正安國論に示しになつてある、現世には大なる安愚を與へ、生命終れば永遠不滅の樂地に導き助けんとの活きたる慈悲心の發現である、この大慈悲心は太陽の赫々たる光輝と正しく光を争ふに足るものであると思ふ（拍手大喝采）こうで其事は確に日蓮上人の御精神であつたことが諒曉、八幡抄に現はれて居る

夫から色々の問題の大解決の發表大改革の宣言でありませぬ、色々の意味が籠て居ります、旭日に向て題目を唱へ給ひし如く、旭日に向て唱へ、日蓮上人當年の大理想は、一代三十年の主義行動と、世界に遺せし千歳不滅の徳澤及末法萬年の光明とを含蓄して居たのでありませぬ、されば日蓮が宗旨の發表を此旭日に向て行たは

太陽一たび世に光顯せば、至法無量の説師人師の法門は皆日出で、後の星の光、巧正の後に操きを知るとの思召を追憶し聯想して以て統一的の信念を把住すべきでありませぬ、外の佛菩薩は星の如き光である、然るに彼方に行たり此方に行たりして色々のものを拜ひと云ふは、日蓮上人の唱へ給ひし題目の大理想大精神、旭日に向て開宗し給ふたる一大事因縁が分らんことになりませぬ（拍手大喝采）實に日蓮の唱へ給ひし題目は一切衆生の闇を照らす大法一切の佛敎を統一する處の中心の大教義である（拍手大喝采）開目抄に於ては一切經に壽量品なかつせば天に日月なく人に魂なく國に大王なく山河に珠なきが如しと云てたいでなざるが、若し此三大秘法の南無妙法蓮華經がなければ、則ち天に日月がなく山河に珠がなく國にしては大王なきが如く人に在ては魂の無い様なものである（拍手大喝采）南無妙法蓮華經は決してフラ／＼飛び行くものでない、人類は十方三世を貫ける處のこの妙法によりて救はれるものである、拍手大喝采）決して南無妙法蓮華經が彼處此處に飛行くものでない、諸君は宜しく顯佛未來記を精神を籠めて聽て置かなければならん「此人は守護の力を得て本門の本尊妙法蓮華經の五字を以て、闍浮提に廣宜流布せしめんか」とある此闍浮提に廣宜流布せしむべき題目は大本尊の本尊より出て來るのである（拍手大喝采）南無妙法蓮華經は闍浮提統一の大本尊の本尊である（拍手大喝采）此南無妙法蓮華經は總體の本尊諸佛諸菩薩を綜合し統一せる四方八面舉て漏る事なき圓滿具足の大本尊の全體である、先年西洋人が來て身延にある南無妙法蓮華經と書てある祖師の題目のはねてあるのを見て、五大洲を引くるめて包む力を以て居ると云たうであるが、實に五大洲處でない三世十方を包む一念三千の大法であつて、ちよつと來て見た西洋人ですらう云ふ事を云て居る、念佛宗では阿彌陀



様を認めたらから南無阿彌陀佛と唱へるのであるが、我宗は妙法蓮華經を本尊とするか故に南無妙法蓮華經と唱へるのであつて、題目を唱へて後佗の神佛等の信仰對象を求むべきものでない(拍手喝采)旭日に向て宗祖の唱へ給ひし題目は本有常住の本体、三世十方の諸佛を包含し現世は安穩未來は成佛せしめる活力度を有する大本尊である、本門の本尊に示してある妙法を信するが故に南無妙法蓮華經と信唱するのである南無妙法蓮華經は國に在ては天子様の如く人に在ては、魂の如く天に在ては太陽の光の如く、一切の教義の根本の大精神統一の理想の大本尊、其事を考へてお題目をお唱へなされば日蓮上人もお歡びなされるのである、尙ほお唱したい事もありませんが段々辨士も出席されることでありますから私 は是で了ります(拍手大喝采)

○

池上日普

出る日の光りとともに末のよの

やみ路を照す法うとふとき

○

釋日東

日はすでに出でけるものを人の子の

千々のひかりをしたふあわれさ

不  
命  
常  
樂  
院  
日  
經  
上  
人

(接前)

在總本山 野口義禪 稿

● 流 離

嗚呼先には腹を折られ今亦肉刑に逢ふ茲に至りて天下幕府を憚り一人として、上人を庇保するものなし、到る所擯出せられ行く所上人の敵ならざるなし、上人常曰「嗚呼日蓮上人の言に釋尊の御在世より我時は怨敵愈かさなると、經文にあはせられ候、然るに日蓮上人の時人は人少くありつれども、法華經を持てる程のもの、日蓮上人を見捨玉はず某が時は日本國の法華宗は一同に見放され、日本の淨土宗は一味になり、日本國の國主は相手にならせられ、某唯一人なれば法華經の如來怨嫉滅度後の經文に當り況滅の况字釋尊の時よりは日蓮上人の御時日蓮上人の御時よりは、今我時はあなねたみ多く候」上人此時の境遇は四面最闇黒の中に經文と云ふ一道の光明に照されてたどりを進む實にてありしならむ

● 説 義

當時諸法華宗のものとも常樂院は時機を知らず、猥りに折伏を行して天下の動亂を起す初心者なりとの誹謗に對し、雪山童子は半偈の爲に身をなげ、常啼菩薩は身を賣り、善哉童子は火に入り、樂法梵志は皮をばき、



藥王菩薩は臂を焼き、不輕菩薩は杖を家り、獅子尊者は惡王に頭をばねられ、提婆菩薩は外道に殺され、此等は如何なりける時ぞやと考ふれば、天台大師は適時のみと説かれ、章安大師は取捨得宜不可一向と記され、法華經は一法なれども機に隨ひ時により其行萬差なるへし、佛記曰我滅後正像二千年過て末法の始に此法華經の肝心、題目の五字計、引者出來すへし、其時惡王惡比丘等大地微塵より多くして、或は大乗或は小乘を以て競はん程に此題目の行者に征せられ、在家檀那等をかたらいて、或は異り或は打ち或は牢に入れられ、或は所領をめし或は流罪或は頭をはぬべし、雖然、退轉なく引るならば怨を爲すもの國主は同士討を始め、餓鬼の子を厭ふが如く、後には他國より責めらるべし、乃至我弟子と名乗る人々は、一人もれくして親を思ひ妻子を思ふべからず、所領をかへりみることなかれ、無量却より已來親妻子所領に命を捨つること大地微塵より多し法華經の御故には、未捨一度法華經をば若干行せしかども、斯ること出來せば退轉して止に、譬へは湯をわかつて水に入れ火を切るにどけざるが如し、各思切玉へ此身を法華經にかうるは、石に金をかへ、糞に米をかうるなり云云、此御書を見奉るに天台の適時のみと、日蓮上人の機に隨ひ時によりて、其行萬差なるべしとは、古今相對の文章にして、往昔の世々生々のこと、當今末法をたくらへて成二鬼の食、或は入火或は剝皮或は燒臂夫は其時々適ふ行なり、末法今の時は不惜身命の行に身を顧みず命を捨る時なり、今昔相比適時而已と釋し、高祖は時によりて其行萬差なるべしと遊ばされたり、何ぞ此書の面に末法の一時に憶病女々しくするの異行あるや、三大部三返讀み五返通り、亦一代經を一覽の物知りと云ふと雖ども、洛中の智者達此御書を末法一時の用捨と見成す詳見の疎學にては、三大部の文勢義勢者と年月教

はすなり  
 又諸法華宗の者共、常樂院は日本動搖の矛盾を起す大惡人故都鄙共に永樂銀を捨るに擬ひ常樂院の藥物なり  
 惡事眼前の惡人なりと云ふに對し

佛御在世に舍利弗の惡名、末法に日蓮大聖人の惡名眼前なり、日經は小郷小村の内にて無位無知惠の貧人にて非二人數不肖の身なるに、日本國主の相手に被爲成、一天下の上下萬人知拙小身悉く日經を憎むこと少しく日蓮の筆端に叶歎と覺候諸人余を罵る様は日經丹波を拂はれ亦若敷を逐はれ、知見谷京極を擯出せらる、皆修行の道曲るか故に身の番處なしと惡口すれども、却て祖師の御書金言に叶へるか、佐渡御氣書に曰「あ、嬉しや檀王は阿私陀仙人に賣られて、法華經の功德を得玉ひき、不輕菩薩は上慢の比丘等か杖に當り一乗の行者となり玉日蓮は末法に生れて、妙法蓮華經五字の故にかゝる責に値へり、佛滅後二千二百餘年間、恐くは天台智者大師も、一切世間多怨難信の經文とば行し玉はず、數々見擯出の經文を讀みしは但日蓮一人なり、一句一偈皆與持記は我なり云云、右筆端の如きは末法今時に於ては、日經並に弟子檀那等の事なり、日蓮上人國主の敵にするは正法を行するにてこうあるなれど遊ばされたる、御書を見奉れば日經の身に取て秀逸と存するなり余を誦るこう師敵對墮獄なるべき」と一々經文に合して滿腔の熱憤を演述せり



◎鐘とお経

紫雲花堂主人

松尾忍水記

右は過般。備前和氣郡和氣町本成寺に於て。鐘樓と經藏の作られし際。同心諸子に對ひて辨せんとせしもの也。今筆に出して圖報の餘白を借るとはなしぬ。

◎教學布教に繁忙な真最中の顯本法華宗が、一代藏經と買入たのは兎に角、梵鐘を鑄造するのは甚迂遠に似ては居るまいかと云ふ人もあるが、もう一概にも云へまい、塲所がらなきは大に之を鑄造するの必要があるばかりでなく、教乗上からしても功德が無いと云わけでもないから。

◎傳ふる處の「祇園精舎の鐘の音は諸行無常の聲ありて病める人も之を聞きなば多くは瘡ゆ」と云ひ、又阿含經に「若聞鐘聲三途休苦(取意)」と云ふやうなる功德は、本門三大秘法の受持せらるゝ今日、ありがたく感すべきものにあらざとすも、必ずや功あるものには相違がない。

◎一代藏經の購入は勿論有益なことで、門外漢の人々すら争ふて購入する場合ゆゑ、餘力あるの寺院が之を求むるは當然で至極賞讃せねばならぬ、高祖の「一切經、必ず讀むべし」の御金言に徴しても頗る其購入は慶ぶべき事である。

◎本成寺には、この梵鐘と藏經とを併せ作られたのであるが、鐘とお経之れが餘程因縁が面白いから、こゝに「鐘とお経」と題して一言を記す所以なので、

◎高祖が「又醫學すべきもの三あり即ち藏經外經藏經の御金言に隨へば、無量あるもの學問を爲すべきで、況や内經たる一切經に志すは、本宗學者の然るべきことであるから、この購入は此旨趣から云つても、又別に經典崇高の點から云つても。

◎處が經は其知を致すもので愚惑は之が爲に除かるゝのであらうが、しかしながら之を有智のともがらに蒙らしむべきものであるから、あらゆる多衆に施益するとながらない。

◎然るに鐘は聞の美思を思むべきものだらうで、耳あるもの假令畜類と雖猶益する處かある、況や人をや、况や有智をやである。

◎其梵音が百里を徹して響く時に於て、信徒たるものは其信仰を更に増進せよとの警告であると思ひ、不信者も亦、其來る處が顯本の道場なることを知るに於ては、其大音響が耳朶にふるゝ度に、一種の説法を聴く思がするであらう。

◎更にまた斯く思惟すべきものであらう、朝またき心清新なるの時、ゴーンと響き渡るを聞いたならば、斯の大法に遭へるの幸福を欣んで、終日善良なる行爲と世を益すべき事業に勵むべく考へ、又夕雲迷ふ暮れの際、ゴーンと響き傳ふるを聞いたならば、世は無常で墓なないものゝ道理を分け知つて、如何にも常住に到らんとを勉むべきである。

◎ひかしから講堂等の左右に、經藏と鐘樓とを相對して建てべき由來があるのだらうだが、之は考へべき趣味がある。



◎經は見るべきもので多くは智者を益するもの、鐘は聞くべきもので多くは多衆を益するもの、此二つのものは一寸離れがたない因縁があるやうで「相對見聞利益」とは之れであらうではあるまいか、(丁)

◎學則改正の必要を論じ敢て本宗教師に望む

廣部永真

宗門現時の進運は宗門教師の護法心に富めるの現象にして、宗門教師の護法心は即ち宗門の元氣なり、此元氣の活動力能く現時の宗運を現出せるなり、是れ余が常に感謝する處にして、又是が持續を切望せずんばならず、所謂居治忘亂の諺の如く、現今の進運を謳歌して未來の經營を怠らんことを憂慮す、否寧ろ宗門現時の進運を持續する能はざるを慨歎す、於是乎卑見を吐露して敢て諸師に訴ふる處あらんとす、夫れ宗門の元氣を培養するに他なし、與學の良途を設け能弘の人を育英するにありとは、余が言を俟たざるべし、而して是が實行を見んには自ら經費の多端を免れず、故に思ふて語らず知て行はざるの隱君子あるや必せり、然れども經費の多端を怖れ徒らに繩綆の窮策を施さば、温を嫌ふて低地に就くの愚に何れぞや、是れ眞正の護法家にあらずして徒食偷安の狗彘たり、余が所論は決して富嶽を負ふて玄海を超へ死骸に歩行を促すの類ならず、山は山として水は水として活勢の運行し得らるゝ範圍に於て、此道を講究せんと欲するもの、豈至難の業としも云はんや、却て憂ふ施設の難易は一般教師護法心の軟弱に歸することを、所論に入るに先ち一言の注意を要するものあり、今は時節柄學林紛争の事あり、爲めに言ふ處あるが如く思惟せられ、所論門前拂ひを食ふの憂あるを恐るゝ是なり、余が此論策は飽迄諸師の賢腦を煩はし、宗門公議の上にて其本能を盡さんことを望む、余が所論は既に昨年宗會議員たりし當時開會請求の手續全結したるを以て、芽出度公議に榮譽を得んとせしに、端なくも改選の非運に逢着したるをもて、本稿は余が遺憾を包んで、文庫に納め、爾來一歳の間に更に大に余に熱意を興へたり、今や三十六年度宗會議員の職に就き、再び文庫を

開て拙き筆を呵せしむ、請ふ諒せられよ

改正點

- 一 學科を三分し豫科、本科、專修科とす
- 一 豫科、本科は全く宗費生とし、專修科普通部は補費生とす
- 一 入學及學生程度
  - 「豫備生」 度牒試験に及第し豫生科たらんとする者
  - 「豫科生」 尋常中學校入學試験に合格したる者
  - 「專科生」 尋常中學校へ入學するの學力なき者或は疾病事故等ありて正則の學業を修せざる者を以て專修科普通生とす
- 一 高等部は各自專修者の入學とす
  - 學年及課程經費
    - 「豫備生」 度牒拜受後尋常中學校試驗済迄、自費支辨
    - 「豫科」 五年、普通部は尋常中學、宗乘部は現今の通り、宗費支辨
    - 「本科」 三年、普通宗乘兩部共現今の通り、宗費支辨
    - 「專修科」 四年、普通部中學課程、宗乘部豫科本科の折衷、補費半額
    - 「同高等部」 各自専門の修學とし研究部に餘乘を置く、自費支辨
  - 一 宗義部學科の配置は専門教師に一任す宗費生にして疾病若くは事故等の經費は自辨とす
  - 一 豫科本科を通して教師三名を要す豫科に一名を置き宗義の安心部を教授せしめ専ら精神教育に勤め生徒の監督を司らしむ
- 一 但し兩科共特別臨時講師を置くものとす
- 一 經費は現今學林費の二倍を以て實行し得らるゝを信す、現今の經費は「一、六」にして之に「一、四」を加へ



則ち「三」を負担せば實行の美業を得ん 然して其教授の成績は現在に優る事十を以て數へらる

一今暫らく諸方面の負擔額を合計せば左の如し  
現今宗費の總額は徒弟教育費をも合せて「四」を負担せり 内「一」を負担償却に充て「一」を政費殘り「一」六が學林費となり居れり 若し詳細に講究し來らば 他の方面より幾分の繰り廻しを得らるべし 然るときは宗費總額「四」五の程度にて實行し得るを知る「四」五の負擔は充分活躍の運行し得らるる範圍内たり 余は更に重ねて其利害得失を論述せん 幸に判斷せられよ

現今宗門の子弟を視るに 多くは高等小學に入りて中學入學の準備をなせり 然るに現時の如く豫科本科共に雜費生として 高等小學卒業の後豫科生たらんとするに於ては 其師親は一ヶ年少くとも六十圓内外の出費を要す 而して其弟子一人を養成して他に教育する者なきに非ず 次弟を又順次に入學せしめざるべからず 斯くて内外交も費す處到底望を達し能ふべくもならず 故に學林に入學せしめずして自房若くは縁家に頼み 尋常中學に通學せしむるあるを視る 是れ猶ほ稀有の事にして多くは高等小學卒業後停學し 生文字知りの片輪もの面已多く何の用をも成さざるに至る 是れ實に愛惜すべき事にして 學則改正の一日も忽精に附す可らざるにわらずや 一度現情を公平に觀察せよ余が憂慮の決して不當ならざるを知らん 否事ろ時機の遅れたるを悔るあらん

然るに此意を知覺するもの或は行政當路者に要請するあり されど當路者は立法者の規定せる範圍に於て其運轉を司るのみ 又能く消極事務の取扱ひ易きは行政者の恒なり 何ぞ積極的事業に熱注するの餘地あらん 軍り是が改良進歩を企圖し宗門の元氣を恢皇せんとするは 他なし一般教師の護法心則ち僧侶一般が一段奮勵の志氣是なり 此一鼓奮起の思念は能く立法代議者たる宗會義員を動かす 公議茲に蒸成して學則茲に面目を改むるを得ば宗門の幸慶何物か之に加へん 故に余は枝葉的當路者に強求するの愚を捨て、其根本たる教師の賢慮を叩き 所謂輿論の力を起して是が實行を三十六年度に開始せんとを切望して止まざるなり 宗門の元氣 嗚呼宗門の元氣 活動力は茲に宗會義員を立たしめ 新道恢皇の根柢を造らしめよ 至至屬屬

念願

在備州 南山道 人稿

日宗各派聯合の開宗紀元六百五十年大會に對し、吾人は多少異義無きにあらざりし、其將來に對して亦希望なきにあらず、然れ共同會既に締結されたる已上は、吾人亦何をか云はんや、吾人は帝國臣民として、將た又釋尊の遺子として、宗祖の末弟として其成立を祝すべきを信すればなり、故に過日の大會に對しても吾人は可成其盛大ならんことを希望するの一人なり、但輕浮にして一時の熱に浮され易きは我國民の弱點也、熱し易きが故に冷め易きなり、浮かれ易きが故に能く忘る、也、紀念大會は今や全國の流行也、天下咸醉へるが如くにして大會を迎へたり、是れ蓋し本宗信徒が必ずしも其大會の實質を研究して之を喜べるよりも、寧ろ此の如き從來例なき各派聯合の大舉傳道が、頗る今日の沈滞せる宗教界の情眼を醒破したる壯舉快舉たるを喜ぶ者なるが如し、うは兎もあれ、輕浮善忘なる我信徒が、忽ちにして今日の狂せるが如く醉へるが如き状態より醒めて、頼に所謂紀念大會なるもの、成立をも念頭に忘る、が如き事あるべからず、如何各派賢明の諸氏、尙同會に有力なる各派具眼の士本化宗友會なるのを組織し、種々の方面より佛宗祖の本懐を研究されつゝありと聞く、爲法爲國大賀の至にあらずや、乞博學なる諸士よ我慢の邪心を去り菩提の善心を起し、誠意以て教義の旨歸として誤るなく、片時も早く日宗各派合同の方針を計り以て他宗邪派を折伏し皆歸妙法の實を揚げんことを南無妙法蓮華經

日蓮門下の勢力

窪田貞二

余日蓮門下の大勢を研究せんと欲するや久し頃日寸閑を得たるを以て之れが調査を爲すことを得則ち左表は實に明治三十三年十二月三十一日現在調査なり  
由是觀之ば轉た悚然の情無き能はず常に日蓮門下生は慨嘆して謂はずや内に身を養ふの資なく外に護るの信者なしと豈計らんや無住寺院は全國に優に壹千三百三十七ヶ寺の多きに登れり斯る無住寺院に住職を擔任せん乎實に千百三十七人の住職を有するに至る亦一大勢力と云ふべし然るに斯く多數の無住寺院をして徒らに空しくせしむるものは果して何等に職由するや住職其人の無なるを以てか余は其原因那邊にあるかを知らざ



るも寺院の創建寶塔の造立は蓋一朝一夕の事業にあらず必らず是が開山たるや若辛慘僧の結果に外ならずと  
 信ず明治聖世の當代に迫んで頼廢せしむるは平素佛祖開山の報恩謝徳を稱導せらるゝ縮衣方袍の甘受せらる  
 處なりや殊に各派が根據地とも云つべき日蓮宗の關東に於ける富士派の靜閑に顯本法華宗の千葉に本門宗  
 の靜閑に本門法華宗の關西に何れも寺院の數に比して任職は其三分の一を歛り如斯して過ぎん乎日蓮門下遂  
 に破法の因縁に據りて阿鼻獄中に叫喚するの人とならん乎嗚呼

府縣名	日蓮宗	富士派	顯本宗	本門宗	法華宗	本妙派	不受派	講門
東京	三三七	二五五	五七	二九	二九	二二	二四	一一
京都	二六六	一一	二〇	二八	二八	二九	一六	一一
大阪	二〇九	二二	五五	四二	二八	二八	一六	一一
神奈川	二四二	二四	四四	四五	二九	三五	二四	一一
兵庫	七〇	二四	四四	四五	二九	三五	二四	一一
長崎	二二八	二二	二二	二二	二二	二二	二二	一一
新潟	一三〇	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
埼玉	六三	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
千葉	三九六	二六	四〇	二七	二七	二七	二七	一一
茨城	三四	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
長野	二二八	二二	二二	二二	二二	二二	二二	一一
愛知	九六	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
三重	二〇	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
奈良	二二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
和歌山	二二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
徳島	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
香川	七八	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
愛媛	三二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
高知	二二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
福岡	四二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
大分	二九	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
佐賀	二四	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
熊本	五〇	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
鹿兒島	六五	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
宮崎	五八	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
鹿児島	六〇	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
沖縄	三六	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
北海道	三六	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
合計	三〇〇七	三八六	四一七	四〇三	一四六	一四六	一四六	一四六

府縣名	日蓮宗	富士派	顯本宗	本門宗	法華宗	本妙派	不受派	講門
宮城	一一六	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
福島	二六	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
岩手	八八	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
青森	三三	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
山形	一一五	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
秋田	三七	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
福島	七七	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
石川	五七	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
富山	三三	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
鳥取	三三	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
島根	三三	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
岡山	二二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
広島	二二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
山口	二二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
和歌山	三七	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
徳島	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
香川	七八	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
愛媛	三二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
高知	二二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
福岡	四二	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
大分	二九	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
佐賀	二四	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
熊本	五〇	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
鹿兒島	六五	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
宮崎	五八	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
鹿児島	六〇	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
沖縄	三六	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
北海道	三六	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
合計	三〇〇七	三八六	四一七	四〇三	一四六	一四六	一四六	一四六

本表の右傍の數字は寺院にして左傍の數字は任職なり



統一圖報

僧俗同信會の成立

時來り機熟し宗門統一の聖業は、熱誠なる多大の同情によりて日一日其實行を促進せるものあり、吾統一團の理想は今や現實となりて、聖祖御照臨の下に將に其美業を取めんとす、げに歎ばしき事の極へならずや、されど是れ猶ほ統一團が企圖せる統一事業の第一歩のみ、一天四海皆歸妙法の聖語闊浮提内廣令流布の金言を事實たらしめんと欲せば、須らく尙は數番の堅揮萬解の熱情あらざるべからず、然るに願みて我背後の軍陣を檢すれば、聖子聖業を解せず、長者の子孀子のうれを學んで徒ちに蝸牛角上の小争に纏繞し、同門相殺哀れ背祖師敵の罪咎を取てし、俗士は責を避けて宗門の隆否を隔岸の火災視し、僧徒は相率ひて黨同異伐の醜劇を演じつゝあり、斯くては千歳一遇の佳會も空しく去らなん、由來宗門の經營宗義の發展は眞俗同共の責務にして、佛祖の御眼には眞俗同しく一團の信教者たり何の隔異か之あらん、唯形の上に多少の異點ある止まずとの勇猛悲愴なる決議をなし更に此目的を實現せしむべき機關として決議案遂行期成同盟會を組織したり是れ實に日英同盟の成れる年の四月二十日なり嗚呼時來り機熟す千歳一遇の佳會正しく今年にあるか活躍の機を解し進退の機を察するの士は更に新しき大覺悟大決意を要す今日ば情眼三昧に入りて痴夢を貪るの時にあらず一小門内に居して小我を争ふの時にあらず覺醒せよ、聖祖の血と肉とに依りて新しき生命を得んと欲するの人は想起せよ、佛祖冥々の照鑒は嚴然として我等の頭上に懸れる事を

日什大聖師の仰に曰く大聖人の御内證より垂れ玉ふらん御慈悲を信用して高祖の御心中より直ちに法水を酌み奉るべしさて我輩分の及ばん程は隨力弘通をはげまし佛祖の化機を助け申さば定めて大聖人の直弟の御影達も正直に渡らせ玉はん程の内證に喜ばれ參らせこうせんすらめ曾て上代の直弟をば實證を知らずして是非申し難し又曰く何れの御門徒なり共經文御書の如く改悔ありて弘通有之ば隨身致すべしと顯本法華宗と稱する宗門は此卓犖たる抱負公明なる見地の下に集れる神聖なる教團にあらずや然らば統一の聖業を遂ぐるに當りては指導者開導者を以て自任すべき聖職を帯ぶるも

のみ信仰の志念は一なり、然るに二者共に其責務を忘れて區々の私情に走れり、さても悲むべきの現象ならずや、此現狀に感ずる所ある至誠求菩提の志士相集りて僧俗同信會なるものを組織し、去月廿二日淺草山谷圓常寺に其發起會を開きたり、今其宣言綱領及會則を紹介せん、同門の眞俗請ふ先を争ふて來り會せよ、若しうれ首鼠兩端去就の決に迷ふものあらば、开は明かに衆魔に魅せられつるの徒のみ、宗開兩祖の御門下にはさる曖昧未練の徒あるを許さず、露露々々善思念之

僧俗同信會宣言

本佛の慈光法界を照發すれ共衆生の迷雲天空を塗蓋して世は尙は闇黒の裡に苦めり顯本の清香古今に薰發すれ共邪教の妖氛地上に彌布して人は尙は迷信の淵に沈めり嗚呼悲しからずや、聖祖日蓮上人の門下に列し統一の聖斷に感憤せるもの此景狀に對して三たび思を致さざるを得んや茲歲開宗紀元六百五十年に當り法運回轉の靈氣頓に動き熱烈なる信念に驅られて集りたる、聖祖門下全國宗徒大會は各教團共通の大會堂を帝都の地に建設し進んで各教團の管長等に對して統一の實行を迫り其遂行を見ずんば

のにあらざして何ぞ我宗門の宗粹實に茲に在り我教團の特長亦茲に存す法理化儀共に大聖の御義を奉じ統一の綱領を明かにし區々紛乱たる法我を蹴て起てるものは吾日什大聖師にあらずや法我猶ほ捨つ焉ぞ俗臭紛々たる小我の卷に彷徨するを容さんや是れ我宗僧俗の古今を通じ忘るべからざる所之を中外に施して其靈効測るべからず今や我宗門の實相を通觀するに果して此宗粹を敬重せるか此特長を發揮せるか蝸牛角上の小闘に熱中せるの徒はなきか同門相殺の禍患に陥没せるの輩はあらざるか千歳一遇の轉機を活用し駕御すべき慎重聖實なる覺悟ありや若し夫れ日什大聖師の遺訓を埋却し去らば什門は既に無きなり國家亡て山河存し宗精廢して伽藍あり嗚呼悲しからずや、夫れ宗義は精神の如く宗門は軀體の如く宗政は神經系の如し若し夫れ宗義を無視して宗門の隆昌を見んとするは我腦を喰て身軀の健全を欲するが如く復宗門の經營を外にして宗義の發揚を望むは身軀の營養を執すして精神の健全を求るが如し俱に共に偏見局量の失を免れず然るに我宗現下の情勢を見れば多くは此兩偏見に局して爲めに宗連の進行を阻害せんとす眞に痛嘆の極



たるなり是れ畢竟宗義と宗門と不離一軌の活動を執るべき宗教機關の充全を欠けるに基因す我等此景狀に對し護法愛宗の念禁する能はず茲に於て乎宗義の發揚に盡砕すると同時に宗門の經營に留意し先づ宗義の純一と擴張とを圖り宗門の平和と進歩とを期し内宗内の統一を明かにし外 聖祖門下の各教團に對して統一の機運を促進し又各地布教の脈絡を取り僧俗一般の氣脈を通じ同心水魚の聖訓を奉じて勇往邁進し以て顯本法華の教光を天下に擴充せんとを期す請ふ同感の僧俗進んで之を賛成せよ

明治三十五年五月

僧俗同信會綱領

一本會は宗義の統一と擴張とを圖り宗門の平和と進歩とを期す  
 一本會は内、宗内の統一を圖り外、聖祖門下各教團の統一を促進するを以て緊急の實行問題とす  
 一本會は毎年四月定期大會を開き宗義擴張宗門進歩に關する方案を議定し且つ各地布教の脈絡を採り僧俗一般の氣脈を通ず

第一章 名 稱  
 第一條 本會は僧俗同信會と稱す

第二章 組 織  
 第二條 本會は顯本法華宗の僧俗純信のものを以て組織す

第三章 目 的  
 第三條 本會の目的は別紙の宣言及綱領に定むる處の如し

第四章 事 務 所  
 第四條 本會は東京に本部を置き各地に支部を設く

第五章 織 員  
 第五條 本會の職員を定むる左の如し

一 商 量 員 若干名  
 一 事 務 員 若干名  
 一 會 計 若干名

第六條 本會の重要な方針及事務は商量員に於て之を協定し事務員之を行ひ本會經費の収支は會計之を司る

第六章 職員の選任及任期

第七條 商量員は大會に於て之を撰出し事務員及會計は商量員の合議を以て之を定む

第八條 商量員は滿一ヶ年を以て任期とす事務員及會計は商量員に於て何時たりとも任免することを得

第七章 入會及退會

第九條 本會の宣言及綱領を賛成する本宗の僧俗にして入會を申込むときは商量員の合議を以て之を許す  
 第十條 本會の趣旨に戻り若くは本會の軀面を傷たるものあるときは商量員の合議を以て之を除名す

第八章 會 議

第十一條 會員大會は毎年四月之を開き商量員會は首座商量員に於て必用と認めたる時又は商量員三分二以上の要求ある場合に之を開く

第十二條 臨時會員大會開會の必要あるときは商量員全軌の決議を以て之を開く

第九章 經 費

第十三條 本會經費は會員の有志義捐を以て之を辨す

第十章 補 則

第十四條 本會の會則を變更加除するの必要ある場合に於ては商量員の合議を以て之を決す

以上

東京市淺草區吉野町百九番地

僧俗同信會假事務所

●大阪開宗紀念大會の概況

難 思 菴 報

大阪に於ける本宗の紀念會は、四月十一日を以て蓮成寺に開かれたり、元來大阪の紀念會は成るべく聯合して各教團と共に其正式を奉げんとのこと、清瀨貞雄師と日蓮宗圓妙寺の深川觀察師との間に交渉せられたりしも、日蓮宗各寺院多數の意見は、開宗紀念會は開修すべけれども、大會のみにては紀念の意を盡しがたしとのことよりして、紀念會は單稱寺院の方は長久寺に開き、而して紀念として公會堂及び圖書館の設立とを決議し、之が實行を各教團の事業として爲さんことを計畫しつゝあり、かゝれば蓮成寺に於ては單獨顯本法華宗として紀念大會を開くことなれば、其以前より準備に取りかゝりこの準備に關しては、堺妙滿寺も聯合の意を以て、同寺住職溝口會旭氏は前々より來りて、之れが準備に専ら力を致し、又蓮成寺檀家總代、郡山庄兵衛、長尾猶之助、徳重次郎の三氏も日々來りて大に盡力したる結果、内外の準備は悉く整頓し、愈當日に至れば幸にも好天氣にして、清風徐ろに來りて浪花江の澄靜に動き、青藤軒を拂ふの時、門前には新



調の大國旗と井桁に橘の紋を染抜きたる大旗とは交叉せられ、皆歸妙法の風を含めて清快に翻へれり、凡べての裝飾等は略す、かくて午前の法會はいとも嚴かに修行せられ、午後一時に至れば最早參詣は堂宇に滿ち渡れり、時間の來ると共に紀念會の正式は開かれたり則ち

- 一、受持文 二、勸誦 三、讀經 四、導師祈書要文拜讀 五、檀家總代祝文朗讀 六、男子四名祝文朗讀及供華 七、女子三名祝詞朗讀及供華 八、唱題 九、回向及言上文 十、受持文

畢りて直に演説を開き、第一席には村上貞藏氏登壇して、繰々東京に於ける紀念大會の模様を報告し、併せて自己の確信を述べ來りて大に聽衆の感動を惹き起し第二席には主任として清洲真雄師登壇して、宗祖が六百五十年の昔をしのぶの状況を演べ、又宗祖大理想の如何に確實に如何に明快なるかを演べ、聽衆の感極りて拍手の許に降壇せんとする時、最早時間の切迫を告げ、本山部長野口義禪師の登壇を見ざりしは遺憾の至りなりき、紀念の正式は之れにて了れり

夫れより夜間に入りて餘興は開かれたり、則ち彼の有名なる豊澤新左工門(本名林覺之助蓮成寺の檀家)の寄

附として、日蓮記を主とし其他の淨瑠璃數番を演じ、其後祝宴會の席上に於て百人一首を骨子として、其他いろ／＼の面白き趣味を附けたる大福引を開き、一同に向て大に趣味を興へたれば、席上立て演説するものあり、吟詩を試るものあり、劍舞を爲すものあり、中々の盛會にして各歡を盡くして散會し歸途に就きぬ、今該日朗讀せる祝詞及各姓名を得たれば左に一々之れを掲ぐ

▲祝詞

本佛釋尊入滅以來末法に入りてより百七十一年の後貞應元年壬午の春二月十六日我大日本國に降誕せる容姿端正神采非凡の偉人あり、我宗祖日蓮大聖人則ち是なり、抑染衣の始め鳳齡僅に十二、未だ幾許ならずして天賦の雋才頓に現れ、穎悟を以て一山の驚歎する所となる、爾來研鑽且くも廢せず、夙に諸宗の本義を誤れるを慨き給ひ、爲法の精神益堅く勤業苦學殆んど寢食を忘れ給ひ、此間當時幕府の地なる鎌倉に出で、名山大刹を尋ね更に錫を比叡山に駐め給ひ、茲に宗教統一の大志を抱て、或は京師に或は紀伊に或は南都に、凡て有らゆる博學高徳の門を敲き、究極到らざるなし、茲に於て乎大に奧旨を關

▲祝詞

發し、御年三十二歳建長五年四月二十八日清澄山頭變天方に紅光を照らし清風徐に薫するの時、旭日に向ひ我宗誕生の初聲は聖音に依りて轟けり、曰く南無妙法蓮華經と、此日大衆參集の前に臨み、大に其抱負雄圖を公にし給ふ、是ぞ立宗第一の説法、今を去る六百五十年の前に當る佳辰にして、我等の千古不滅に忘るべからざるの聖節なり、熟々惟るに聖祖衆生を啓みて洪業を起し給ひしより滅度に至る迄年を閲する三十、此間四圍皆敵、幾多の巨難相亞きて到るも、從容自若死を見ること歸するが如く、而も磐根錯節に遇ふて益銳なり、何ぞ宏量の汪々たること海の如く、憐生の深き照々として慈母の如く夫れ大なるや、就中元寇の事を未然に豫言し、大に人意を強ふせしめ給ふに至ては、嘗に我宗弘通の大導師として仰々のみならず、又當に國家の大忠臣として尊ふべきなり、今や六百五十年の佳節に際す、吾等不肖と雖も亦信徒の末班に列す、豈敢ひ度みて慶せざるべけんや、猶進では報恩謝徳の爲め佛法外護の任を盡し、聖日の光輝を放たんことを期す、聊燕祥を呈して祝詞に代ふ

維時明治三十五年五月十二日  
蓮成寺檀家總代 郡山庄兵衛敬白

本日を下し開宗六百五十年の紀念大會を修せらる、何んぞ欣喜に堪ふべけんや、回顧すれば六百五十年の昔建長五年の天地は如何なる形象にてありや、政治界に宗教界に悉く皆暗澹たる有様にてありき、茲に於て乎我日蓮大聖人は奮然起て之が矯正の實を行はれ、則ち本佛釋尊の勅使として如來の滅後末法に入りて一百七十一年の頃、生を我大日本帝國に降し以て本化上首の責任として爲し玉ふ所あらんとす、其苦修練行し玉ひたる日に當りては、八宗九宗の碩學高徳を尋ね、儒學に皇學に凡る學として世にありとしあらゆるの方面をも試み給ふ、地の遠隔と處の異境とを問はず、凡る我國に在りて名を得たる程の名山大刹學識卓越の人と處とは、一として知らざるなく問はざるることなし、是時に當りて我日蓮聖人の卓見と責任とは默止すべからざるの境遇となれり、况んや亦當時我國の有様は上下相反し善惡相分たさるの甚だしきに於てをや、此時に適して爲すあるの法とは、唯如來の金言に則り如來の使命を全くするに如かざるなり、則ち法華經本門壽養品の三大秘法事の一念三千是好良藥の南無妙法蓮華經を以て、



立正安國の一大要法と爲し玉ふより外には時機に適當したる要法あらざるなり、建長五年四月二十八日房州の旭ヶ森に於て初めて唱へ、玉ふたる御題目こゝろ、是を誠に濟生利民の大益を與へ玉ふ初聲にてありしなり、立教開宗の大號令にてありしなり、誰か我宗徒たるものこの一大紀念を祝せずして可ならむや、不肖重次郎懐信の末班に列せり、一片の蕪文を獻じて以て聊か報恩謝徳の意志を表し奉る、希くは大聖人我等檀信徒の徴志を納受し給はんことを  
維持明治三十五年五月十一日

蓮成寺檀家總代 徳 重次郎敬白

▲祝 詞

本日は如何なる良日ぞ、正に是れ我聖祖日蓮大聖人が立教開宗に對し一大祝典を擧げられたる佳節なり回顧すれば今を去る六百五十年の昔は如何なる時なるかを思へ北條氏は陪臣の身を以て畏くも天皇陛下を蔑にし不臣到らざるなし、當時宗教界の混濁せるもの亦政治界の汚濁せるより甚し、茲に於てか日蓮上人は憤慨措く所を知り玉はず、大聲疾呼以て之れが矯正に努め玉ひ偏に國家の爲め人生の爲め訓誨を垂れ玉ふこと甚だ切實なり、我等幸に其慈海に沐浴

して可なりんや、今や我等幸にこの宗廟の家に生れこの正義を信する事を得たり、何の喜びか之れに過ぐるものあらんや、南無妙法蓮華經  
明治三十五年五月十一日

高等小學校第四學年 利倉駒一郎敬白

▲祝 詞

吾宗祖日蓮大聖人は今を去ること六百五十年の昔、則ち建長五年四月二十八日旭日に向ひ玉ひ、初めて南無妙法蓮華經と唱ひ玉へり、それよりこのかた種々の大難に遭ひ給ひ、或ときは龍の口に於て首の座にすわり玉ひし、或るときは佐渡の雪の中に三ヶ年間艱難なされ玉ひて、御一生の間に大難四ヶ度小難かずしれざる程の艱難にあひ玉ひて、我等の爲に是好良樂の大法なる南無妙法蓮華經を我日本國にひろめさせ玉ふ、誠に難有こと限りなし、今茲に御報恩の爲めに紀念大法會を行はる、敏夫この席に列り御恩の萬分の一に供へん爲め、聊か祝文を奉る南無妙法蓮華經  
明治三十年五月十一日

尋常小學校第三學年 清瀬 敏夫敬白

▲祝 詞

統一圖報

することを得たり、今や此の一大恩師の開宗せられたる佳節に遭ふ、豈に報恩謝徳の爲めに一片の祝意を表せざるを得んや、聊か不文を獻して以て祝詞に代ふ  
明治三十五年五月十一日

高等小學校第三學年 上山信二郎敬白

▲祝 詞

明治三十五年は正に是れ建長五年を去ること六百五十年に相當れり、此の六百五十年の昔は如何なる時なるぞ、佛記の所謂第五の五百歳にして末法濁世の時なり、この時に當りて本佛釋尊の勅使として吾大日本帝國に降誕、給ひたる吾宗祖日蓮大聖人こそ其使命を全ふせんが爲め、上は北條氏の暴政を矯めんとして下は國民に正義を守らしめんが、爲め多くの大難を忍ばせ給ひてこの難有宗旨を開き給ひたる

一大紀念の佳節なり、吾等宗徒たりもの誰か祝して慶せざるを得んや、日蓮大聖人の曰く、我日本の柱とならん我日本の眼目とならん我れ日本の大船とならん等と誓ひ給ひて、則ち正義を發揚して以て國家を富強の安きに置かんことを祈り給へり、吾國人たるもの誰かこの正義たる日蓮大聖人の宗義を信せず

當年は我聖祖師が初めて旭日に向ひ、吾等の爲めに南無妙法蓮華經と唱ひ給ひてより六百五十年であります誠にありかたき事であります、聊か祝文を獻じて篤く感謝申上ます、南無妙法蓮華經  
明治三十五年五月十一日

尋常小學校第二學年 郡山庄太郎敬白

▲祝 詞

茲に花田さん謹んで、我宗祖日蓮大聖人に拙き祝詞を奉る、妾等が常に唱へ奉るところの南無妙法蓮華經は、御祖師様が永々の間多くの御修行をつませ給ひ多くの御艱難を忍び玉ひて、國の爲め君の爲め我等の爲めに、建長五年四月廿八日に初めて旭日に向ひて御唱へ遊ばされたる題目にてお坐しますなり、妾等は今御祖師様の御蔭を以て、是好良樂の妙法を受け持つことを得たり、妾等は茲に開宗六百五十年の紀念大法會に遭ひ奉り、喜び限りなし、妾等外護の任にあるもの、御報恩の萬分の一に供へんが爲めに、此の紀念大法會に列り聊か祝文を呈して、これより後外護の任を盡くさんことを誓ひ奉る、南無妙法蓮華經  
明治二十五年五月十一日

高等小學校第一學年 花田 さん敬白



▲祝詞

謹んで利倉こと妾等の爲りに最も御恩深難有宗祖日蓮大聖人に拙き祝詞を奉る、彼の房州なる旭が森にて御祖師様が初めて南無妙法蓮華經を御唱へ遊ばれてより六百五十年の大記念の年に當れり、誠に喜ばしきこと限りなし、此の御祖師様がこの國に御生れ遊ばされずばこの國暗黒なり、この宗旨を開き給はずば妾等はいつまでも迷ひの衆生を免ることを出来ざるなり、殊に妾等婦女の爲めには法華經の御題目の功德にあらずば、現當二世の善き果報を得ることかたしとは承はる、妾等幸にこの宗旨を信ずることを得て誠に喜ひに堪へざるなり、今この記念大法會に遭ひ奉り、御恩の萬分の一に供んがため聊か祝詞を奉る、南無妙法蓮華經

明治三十五年五月十一日

高等小學第一學年 利倉 こと敬白

▲祝詞

宗祖聖人が旭に向ひ南無妙法蓮華經と唱させ給ふてより六百五十年に當れり、茲に法壽山頭月朗らかに浪花江の風清きほとりなる蓮成精舎に報恩記念の大法會を奉る、妾等幸に此の好期に當遇す悦ばしきこと限りなし、御恩の萬分の一に供んがため聊か祝詞を奉る、南無妙法蓮華經

明治三十五年五月十一日

高等小學第一學年 利倉 こと敬白

感動を惹き起しめられて、近來稀れなる法雨に浴したりとて、老若男女の喜限りなし、同上人にして、今暫く當地に留錫せらるゝの余裕にあらば、少くとも四五日間は佛説教を願ふものに、すぐ翌四日早朝名古屋常徳寺の記念大會に豫約ありとて、從者一人を召し連れ、輕裝錫を曳かれて御出發せられたるを以て、一同非常に名残りおしく感じ又後日の御來教を待つことゝ爲しかり、之れに付き林覺之助氏が、非常の信心に深し、して同師を懇待せるのみならず、同氏の一家婢僕に至る迄奉つて信心に入らしめ、快く皆一同に平生より參詣もなし、自家に於ても絶へず御講會を開き説教を衆に聽かしむる等、其外多くの信徒外護の本分を盡くす等のこと、實見せるものをして悉く感服せしむるもの多しと云ふ、林君よ愈深く信仰して大阪市の信仰界に幾層の花を増さしめられよ、其次に堺市日蓮宗本山妙國寺を始めとし、其他堺市に於ける同宗寺院檀家合同して記念大會を開き、三日の午後第六時より、卯の日座に於て演説會を開き、前々より懇請せられ居たるを以て、本宗の清瀬貞雄師は大阪より出演して「日蓮聖人の大抱負」と云へる題下に、大氣焔を吐きて該

いかな道書に云く日蓮が慈悲廣大なさは南無妙法蓮華經は末法萬年の末までも流布すべしと、妾等外護の任を全ふして祖恩の萬分に報せん而已

明治三十五年五月十一日

尋常小學三學年 村上 禮子敬白

●坂堺の教況

本日に入りて姫路、神戸の各地布教を經られて、大僧正小林日至上人は大阪へ立寄り給へり、二日には蓮成寺へ來錫せられ、清談高論涌くが如く、聞くものをして坐ろに快談を連呼せらしむるに至らしめ、翌三日蓮成寺檀家林覺之助氏、同上人を懇請して、同日は僧俗共に多數のもの一同に同家へ參詣したり、先づ初めに暫く讀經唱題を修行し了りて説教となれり、第一席に於て、清瀬上人出演して小林大僧正の紹介を爲し、開法隨喜の要項を示され、次に小林大僧正出演せられて因果の二法を懇々と説かれて、或は因縁を説き譬喩を取りて最も分り易く、たゞひ婦女子と雖も悉く解し得て法門の難有と感じ、稍一段のばりたるものにも又は專門の相當學識あるものにも、其説示なるもの、巧演説會に應援と興へ、翌四日本山妙國寺に於て再び午後演説會を開き、本宗の村上貞藏氏出席して記念の報告及自家の意見を演了し、清瀬貞雄師登壇して「統一大本尊」て不題下に、緩々從來信仰の境的の誤れることを示し、圓滿に大本尊の下に信仰を捧ぐべく、其必要と當然の理とを示されて感動を惹起し、最後に妙國寺貫首の説教ありて、兩日ともに盛會なりしと云ふ

●第二回専門夏期講習會

昨夏初めて相州片瀬に本化専門の夏期講習會を起し多大なる功果を宗門に貢献したる橘香會は昨講習會場の決議に依り本年も發起者たることを承認したれば過般來該會の開設に付て種々奔走せる由聞及べるが己に會場及講師等の確定其他の準備も整ひたるを以て會員齋賛員等へ夫れ々案内状を發せしとぞ乃ち

會場は本化上首法花色讀の靈地伊豆伊東、地は山を背ひ海に臨み風光佳絶宛も好し炎暑三伏の候諸都の埃塵を連れ出で此の地に入り試に老樹蒼崗の間を歩すれば涼風一陳亭々として登ゆる聖祖か大慈の血涙を瀧と玉へると覺しき老樟古杉を訪へば棺の叫び塵々として六



百五十年前の昔しを語るか如く更らに目を放て大空を望めば大城山上の烟は迢々として茫々たる大海原の彼方にはの見えるやがて遠山淡々として暮色至るの時伊豆七嶋は點々指呼の間に浮び來るが如く長打曲浦の詩趣感實に絶ゆべし若し夫れ月清く波靜かなる夕節を篠見ヶ浦に立て磯打つ波に耳を澄し弘長元年の夕を回想せば感慨愈深くして盡くることなし。あ、此の地此の會堂祖の靈籠空しからずしてうの盛なる今より思ふべき也然かも伊東朝高の名と共に宗門にうの名高き佛現寺本堂と以て其の講堂に宛て開期中毎朝午前三時間は各講師の高論卓説を聞き退ては各自の寄寓所として宛てたる同地の旅館大坂屋松坂屋等の樓上に安座して激波洋々の間に白帆の來往を眺めつゝ清溪快活に時を移すの別趣味あり、殊に

講師として守本僧正本問僧正本多僧正臨田増正等皆な是れ當世第一流の名士又た田中智學先生は筆硯の事を以て本夏伊豆に遊ばんとせる折柄なれば本會開期中は同地に在りて常に誘導の勞を取り玉はるべく尙は清水龍山師は科外講師として「合延餘談」と題し一家の教義に就て三四回の講演ある筈なれば眞日蓮主義を知

●廣嶋の開宗紀念會 前號廣島通信に記載せし該地本照寺に於ける開宗紀念會は、四月廿六日小林大僧正の大導師にて縣下本團の六ヶ寺院任職出仕勤修せられたり名におも安藝門徒の真中に僅々六ヶ寺の本宗、數より云へば微々あるかなさかの有様なれど、先年板垣管長御選教已來宗運頓に開け、諸師熱誠布教に盡碎せらるゝものから、多數の念佛門徒口をして鼻たらしむるの爲弊、將來益々有望の教田となれり。されば今回の紀念會も非常の盛況を呈し、午前の法要終るや直に大演説會は開催せられ(開會の辭)大橋日斐(僧ふては殿かぬ)安田台城(我願己満足)島田顯恕(二種の尊敬)高田日嶋(發願區別)大橋日斐(大曼荼羅の發現)山名木信の諸師熱心に演了の後小林老師の御親教あり、參聽無慮三百餘名、教益多大ななりしとぞ、因みに山名師出演の際眞宗僧侶の質問ありしが、師が圓熟の呵教苦もなく磨僧をして閉口せしめられしとぞ。

●福井の紀念法要 越前福井の妙經寺に於ては縣下本團の諸師共同して、去月廿八日開宗紀念法要を営まれたるが、今其式の次第を聞くに序式は午前三時第一鐘支度、三時半第二鐘出仕修法にて參詣百五十餘名、午

するものは老若男女を問はず何人にも來り會せよ尤も豫じめ發起者へ入會の手續を爲すを便とす

●路程は東京より海路海船にれば靈岸島より直ちに伊東に至るべく(貨倉圓拾錢)伊東よりは國府津(七拾錢)小田原(六拾錢)熱海(四拾錢)下田(六拾五錢)等の各港に自在に遊覽せらるべく汽車にては沼津又は三島より豆相線に換はり大仁を経て伊東に入る若東の上は直に本會の特約旅館大坂屋に入るべし丁寧親切を以て賄をなし経費は凡て一日三拾五錢の割を以て滞在日數を算し本せしは一は以て混雜を避け各自に悠遊の餘暇を作るべき發起者の老婆心なり、

本會の發助人諸氏は本會の修了と共に各縣下に道路布教の途に上る由併せて右畫策中なりと至囑至望、あゝ多幸なるかな夏朝講習會員諸氏、入ては數多の同志と一乘の深義を談じ出ては聖祖當年の面影を忍び奉り身心共に清淨にして登山會上に遊樂するの觀ありしに就て(鈴木顯良)色法華經(萩原啓門)聖祖の開宗(内藤智厚)等にて中々の盛會なりし由

●梅本長寺の紀念法要 遠記學者を以て有名なる本團々員増田聖道師は、去月廿四日其任職地たる神奈川縣橋本郡大綱村梅本長寺に於て、開宗紀念法要を勤修せられたるが、品川方面よりも多數の信者來詣し、法要中祝辭の朗讀數多、畢りて演説會を開き、福原豊次郎鈴木金藏、淺尾清造、諸氏の隨力演説あり終りに増田聖道師の演説ありて、聽衆無慮三百餘名該地方近來稀有の盛況なりしとぞ

●窪田孤松子の辭職 數年間顯本法華宗事務廳に奉職し事務の敏活を以てうたはれし窪田純榮師は、今回其職を辭して南郷の自坊に還り、自今本團の爲めもはら盡碎せらるゝよし、古人言あり居は氣をうつすと、窪田師たる者宜しく高桂山頭に起臥して、日夜太平洋をすべり來らん潮風を鼓吸し、常へに吞宇宙的靈妙の氣を養ひ、あはれ齋爛せる七里法華の境域を刷新せよ、至囑々々、因みに師の職を辭するに當り、藤兼管長は其効勞を嘉みして金襴五條袈裟一肩を下賜せられ、知己朋友は懇勞會を開催したりとぞ



●宗義顯揚演說會 日蓮宗青年有志家柴田頌秀山田一英等諸氏の組織せられたる本化同心會にては、本月四日午後六時より牛込横寺町圓福寺に於て、見出しの如き演說會を開會せられたり、本團々長本多日生師も招聘に應じて出席せられたり、聽衆無慮四百餘名、開會の主意(柴田頌秀)能く敬ひ給へ(加藤文雅)失題(山田一英)日蓮上人立宗の大綱領(本多日生)等にて非常の盛會なりし由、吾曹は此種會台の續々發生して、諸方面より宗義の發揚を切望して止まず、あはれ中折するなからしめよ

●宗友會の會合 本化宗友會の第九回會合は本團の當番にて、月の七日小傳馬町祖師堂に開かれぬ、會する者本多日生、加藤文雅、清水梁山、井村栴也、山根顯道、岸顯妙、長瀧智大、鷲塚智英、風間潤靜、中川觀秀、松本郡太郎の諸士及び新加入の松原茂久氏等計十二員、外に石井主馬、食滿貞二、西仲梅三郎、大原亮等其他二三の傍聽者あり、田中居士の病氣の爲め來會なかりしは一同の遺憾とせる處、歸て前回は續て信念成佛論の討論は開かれぬ、本多清水兩師の立敵兩論者間に修顯得勝論と現身得果説との大論戰數回に涉り、議論は益々深入せり、於是乎長瀧氏の注文出來れり、日蓮を詳説し、全國各地の紀念は重要なるを論議せるが上に、本末有名寺院靈場遺物等特に精緻なる石版彩色畫數十葉を挿入したる杯、注意おさへ、到らざる限なく大會紀念物として好個の冊子たるを失はず、宗徒としては非一本を購讀するの必要あり(代價金三十錢郵税金壹錢五厘)、因に紀念大會事務所に於て目下編纂中なる大會類末録は、遅くも本月中に編纂済來月上旬出來の筈なり

動物虐待防止會設立趣意書

抑も動物の虐待は、一個重要な人道的社會問題にして、其社會各方面に及ぼす利害の深且大なる、苟も人道の開發に意有り、社會の公益に志有る者は、一日も忽諾に附すべからざるなり

(一) 無罪可憐なる無告動物を鞭りに虐待殺して顧みざるもの、果してこれ人間至當の權利なるか、他動物に對する殘忍刻薄は、やがて人間に對する殘忍刻薄に非ずや、親切他動物に對するど人間相互に對するの如きは、其心情に於て何の異るところあらんや、彼無告の弱者を苦しめて得々たるが如き、未開國民の體防止は實にこれ人道の問題なり

暫く研究の錯雜を避くる爲め、此問題を開して壽量本佛論本國土論の二となし、壽量本佛論より研究あらんことをと、滿場は同意せり、暫時休憩の後幹事(山根)は壽量本佛論の合論を徴せり、本多師の釋尊本佛論に賛するもの三員曰く井村山根風間、清水師の日蓮本佛論に同意者一員曰く長瀧、中川師の理佛を主張せる、其他諸士の未決なる、頗て討論となりて議論は自ら三種の大衝突を來せり、惜むらくは時間の推移議決せずして散會を告げたり次回は師子王文庫の當番にて來月六日該祖師堂に開催繼續して本問題を研究すべし

●各派統一實行委員會 宗友會の散會と共に本多顯間中川、小倉、山根、長瀧、鷲塚の諸士別室に會して大會發務の處理に就て細々協定あり、畢りて聖門各派統一實行法を打合せ、近日三願間五軒事打揃ひて各教團の宗務所を歴訪し以て其實行を促進する事となしたり

●紀念大會聯合會 神田通神石町東湯堂支店より風俗畫報臨時増刊(第二百五十號)として發行せる日蓮聖人開宗第六百五十年紀念大會聯合會と稱する一部の冊子、本團にも寄贈ありしが、書中宗義及び各派沿革等一二誤謬の點なきにあらねど、聖祖一代の事蹟より筆を起し教義の大要宗門變遷の教略を説き、終に紀念大會の光

(二) 然れども之を爲すことの多き、本能的傾向は終に意識的罪惡となりて現はれ、或ひは殺人の大罪を犯すに至る、人を殺すと他動物を殺すと、其精神状態に於て何等の異るところ無きなり、則ち殘忍殺伐の氣風を養成せしめ、犯罪の素因を講成する動物の虐待を防止することは、實にこれ法律上の問題なり

(四) 更に合理的害問題よりするも、家畜運送法、屠場制皮等の宜しきを得ざるが爲め、吾人が營養物として用ゐる肉類、又は乳液に異状を來し、人類社會の健康を害すること實に大なり、且つ又た彼樹間に棲れ、青空に舞ふ可憐にして有益なる歌禽を濫獲するが爲め、農産物に影響を及ぼすこと尠少なりとせず、動物虐待の防止は實にこれ衛生上、經濟上、農政上はた審美上の問題なり

要するに動物の虐待は、人類の品格を破るものなり、文明の體面を汚すものなり、國民の幸福を妨ぐるものなり、社會の美觀を損するものなり、同志相謀つて茲に本會を設立する所以のもの、素より無罪可憐なる無告動物に對する一片の同情に出づと業、又以て社會人情の根本的改善を計り、之に依て健全、優美高尚なる大國民の氣風を養成せんとするの素志に外ならず

規約

一、本會を名づけて動物虐待防止會と稱す











# 廣告

主筆 田中智學居士

## 妙宗

每月一回(六日)  
每號大附録附發行  
所相模鎌倉要山師  
子王文庫  
定價一部金十錢  
(附録共)郵税金一  
錢壹ヶ年前金壹圓  
貳拾錢(不要郵税)  
送金は帥子王文庫宛鎌倉局振込の事  
四月六日「第五編」第六號「既刊」

主筆 加藤文雅

## 日宗新報

毎月三回(八の日)  
發行、發行所武藏  
池上日宗新報社  
定價一部金五錢、  
十八冊(半年分)  
八十五錢、卅六冊  
(壹年分)壹圓六十  
五錢、一切前金の事、送金は池上郵便受取所  
へ振込み「日宗新報主任加藤文雅」と御指定の  
事、六月八日「創立第八百十五輯」革新第二百  
三十六輯「既刊」

# 稟告

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす  
一本誌は一冊五錢十二冊前金五十七錢廿四冊前  
金一圓八錢郵券代用は一割増但五厘切手に限  
一講讀申込の節は住所姓名を階書にて認むべし  
一爲替は武藏國品川郵便局へ向け御振り込の事  
一本誌は別に領收書を發せず但し領收證を要す  
る向は返信料を封入するか或は爲替振込の節  
拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし  
一廣告料は五號活字廿四字詰每一行金七錢なり  
明治卅五年六月十五日印刷發行

發行所  
編輯人 井村 恂也  
印刷人 山根 顯道  
鈴木 暲學

# 發行所 統一團團報部

東京府荏原郡品川町元南品川四百十二番地

## 統一彙報

至聖隨行日誌……………高木松太郎  
一團山通信……………中川孝顯  
聖觀門下の統一事業……………  
宗徒大會決議實行期成同盟會……………  
由亞佛教會の無主義無定見……………山田登太郎  
大會圖末註の發行……………  
一感謝狀……………  
千葉縣の團家紀之法要……………  
團友消息……………  
▲松原忍水君 ▲清瀬貞雄君 ▲石渡日登君  
▲山本通辨君 ▲荒川智會君

## 廣告數件

第八十七號

目次	
一 宗教の利益……………	本立院日警編
一 一大事(接前)……………	妙光道人教
一 本門の本尊(續)……………	本成院院教
一 常樂院日經上人(接前)……………	野口 義輝
一 團宗六百五十年紀念會祝辭……………	柿沼 芳子
一 作西行臥跡……………	松尾 忍水

# 統一團報

明治三十五年七月十五日發行